大東文化大学紀要四十三号

「まだ」と「もう」

柏木成章

On 'Mada' and 'Mō'

Shigeaki Kashiwagi

1 題目 「まだ」と「もう」
2 氏名 柏木成章
3 英文題目 On 'Mada' and 'Mō'
4 ローマ字氏名 Shigeaki Kashiwagi
5 要旨 副詞「まだ」と「もう」を取り上げ、両者の差異を検討することを通じて副詞研究への一つの手がかりを得ようとする。
7 本文

I

副詞「まだ」と「もう」は各々、極めて日常的な語彙の一つであり、両者は一見、全く単純な裏表（＝対称的）の関係であるかのように見えるが、事実は決してそうではない。

副詞については、その中のあるものが、(1)「の」を付して連体修飾語となり得、(2)「だ」を付して述語となり得る、という現象が知られているが、「まだ」と「もう」はまずもってこれらの点で顕著な対照をなすであろう。すなわち、「まだ」は右(1)・(2)の何れもが可能であるが、「もう」は逆に(1)・(2)何れもが不可能である。（ここでは、「さあ行きましょう」「えっ、もうですか」のような場合は考慮に入れないものとする。）

①申込がまだの人は急いで窓口に行って下さい。
②「あの件は伝えたか？」「いや、まだだ」
「まだ」は右のように疑いなく「の」と「だ」を付し得るが、「もう」ではそれは出来ない。
＊①もうの人は帰って結構です。
＊④「あいつは来たか？」「うん、もうだ」
などとは言えない。これはなぜか？
右のごとき語法が「可能」だとした「まだ」も、それを文章語的な「いまだ（に）」と置き換えてみると、
＊⑤当時は発効がいまだの条約が幾つかあった。
＊⑥現実の実行はいまだだ。
などとは言えそうもない（たとえ「である」に置き換えても不可。）から、右の語法自体が「口頭語」的なものであることは自ずから示唆される。しかし単に「口頭語」なら可能だというのなら、元に戻って、どう見ても「文章語」とは見えない「もう」についてこの語法が不可能な所以が解けないから、勿論問題はこれだけでは片付かない。筆者はもともと、右のような現象に興味を抱いて「副詞」に着目しはじめたものであるが、本稿ではかかる点で顕著な対照を示す「まだ」と「もう」を一例として、右現象の意味から、ひいては「副詞」の本質の探求へと向かうべき一つの手がかりを得ようとするものである。

Ⅱ

「まだ」と「もう」に関する先行研究のうち、池田[1]と金水[2]の次の観点を妥当なものと認め、本稿の出発点とする。ただし全く筆者の解釈において位置づける。
池田は、「「もう」は発話時においてすでに起こった状態の移行を意識して用いられるのに対して、「まだ」は発話時以後に起こる状態の移行を意識して用いられているのである。」とし、金水は「「もう」が状態の変化を認識した場合に用いる表現である」のに対し、「「まだ」の方は、状態の維持の認識である」としている。
さて、「もう」の用法には「まだ」と対称性を有さない、

⑦もう一人で終わる。

のような、後ろに数量詞等を伴う用法がある。本稿ではやはり池田・金水と同様、かかる用法をも同一の「もう」の一用法ととらえ、この用法をも理解できるような把握をめざす。また「もう」には、

⑧もう、何やってんの！

⑨彼はもう無我夢中でお菓子を食べ食った。

のような、「非難・叱責する気持ちを表す」用法、「感情があふれて処理できない様子を表す」用法、があるとされるが[3]、本稿ではやはり、これらをも同一の「もう」の各用法として包摂し、これらの用法をも有する「もう」が、ある面で「まだ」と対立しているものとの考えに立つ。以下直接に「まだ」と「もう」を検討することに移ろう。

Ⅲ

右、Ⅱに述べたような観点に立つとき、まずもって問題となるのは、先掲のような、

⑩もう帰ってきたの、ずい分早いわね。

の「もう」の用法と、

⑪もう一万円あれば何とかなったんだがなあ。

という「もう」の用法との統一的把握の問題であろう。この点を池田[4]は、「状態性述語と動作性述語の場合で一見まったく別の「もう」が存在するかのように見えるが、今まで継続していた状態をいったん打ち切るという意味を「もう」が担っていると考えれば統一的な説明を与えることができる」として、「状態性述語文に出現する「もう」の場合には状態継続を打ち切る手段を述語で表すことは当然できない。だからその代わりに「状態打ち切りまでの量を表す語が「もう」に伴って必ず現れる」と解釈するが、この説には同意できない。池田自身がいみじくも指摘するように、当該の「数量を表す語」が「実際は「少し／ちょっと／わずかに」といった少数少量を表す語としか共起しない」のは一体なぜか。池田の解釈でこの事実＝現象が説明できるであろうか。一方、金水は、「もう＋数量表現」として、

⑫もう50円足りない。

を例として、「金額が足りないといっても100円500円ではなく、もう50円だ」として「金額の小ささを強調し」、「目標額への心理的な接近の段階を示している」と考える。これは金水の、「想定と推移」の概念を前提とし、「「まだ」「もう」はこのような想定を前提とし、現実が想定とずれて

いることを示す標識である」として、「想定より現実が進んでいると認識した場合は「もう」が用いられる」とする観点から導き出された解釈と思しいが、この説も適切とは認めがたい。金水は、

⑬かれこれ、もう20年この町に住んでいる。

を例として「必ずしも小さい数量ばかりが強調されるのではない」「次の例（＝⑬）では（中略）数量の大きさが強調されている」としているが、この「もう」は「もう一歩だ」の「もう」ではあるまい。また「想定」という考え方は池田がすでに批判しているとおりだと考えられる。

さて筆者の観点より見るとき、右の点では根本的に池田も金水も同様の立場に立っているように見える。すなわち、たとえば、

⑭もう五人欲しい。（必要だ）。

というとき、その「五人」が現有人員に加わってはじめて「完成」する、との考えに両者とも立っていると見られる。（「あと」との混同がなされているのであろうか。）しかし果たしてかかる「もう」は実際、そのようなニュアンスで用いられているのであろうか。率直・端的にこういった用例を省るとき、実は、発話時においてすでにほぼ十分の域に達しているが、厳格に言えばあとほんの少しの付加が望ましいと言われているのではないか。これは、いわば、

⑮まあ泣くなよ。もう来るから。

のような「もう」と同一の心的契機に立つものであろう。なるほど厳格に言えばまだ来てはいないものの、もはや「来る」ばかりの状況にすでに現在達している、との意を訴えんがために右の例文は用いられよう。右を

⑯もうすぐ来るから。

とすれば直ちにここで論じている数量詞等を伴う用法につながり得よう。

「もう」は「状態の変化」の「認識」であるという。筆者は、

⑰もう出来た。

も、

⑱もう出来る。

も、等しくある「状態の変化」の「認識」がすでに実現されているものととらえる。一方は「出来た」状態にすでに変化しているのであり、一方は「出来る」状態にすでに変化しているのであって、根本的な差異はここに存しない。数量詞等を伴う「もう」が「少量」の例に限られるのは蓋し当然で、すでに基本的にそうである状態への「付加」を述べるに過ぎないからである。しかしながらではなぜ、このような用法が「もう」に

おいて成立可能なのであろうか、章を改めて考えたい。

Ⅳ

「もう」の示す意味は、「変化」といわんより、一つの「運動」のように考えられる。（対して「まだ」は「静止」（的状態）であろうか。）全く普通に、（特定の「想定」なしに）状態性述語を用いて事態を描写するとき、

⑲「みんな来た？」

「A組の人は来ているけど、B組の人はまだ来ていない」

となり、むしろ「まだ」が用いられ、あえて「もう」は用いられないのではないか。「もう」はある「状態」の「変化」への運動＝進行としてとらえられるとすれば、その「運動＝進行」の「勢い」の赴くところ、もはや基本的にほとんどその域に到達しているという側面の呈示が許容され、かつまた「運動」の「矢」＝「勢い」の指し示す「方向」に必然的に生じる「付加」＝「余剰」としての「数量」の指示が許容されるのではないか。われわれは、

⑳もう駄目だ！

㉑もう助からない！

と絶望することできるし、

㉒もう大丈夫だ！

㉓もう何とかなる！

と希望を取り戻すこともできる。これらはダイナミックな「運動」の本質のもたらすものなのではないか。

以上のように考えるとき、先に記した、「非難・叱責する気持ちを表す」乃至「感情があふれて処理できない様子を表す」用法（「まだ」にカウンターパートを見出せないところの）も、次のようにその成立根拠を推測することが可能となるのではないか。すなわち、前者は、「もう（今やすでに）耐えられない、認容できない（ほどひどい）域に達した」との意で呆れ、憤慨を示すものであろうし、後者は「もう（今やすでに）言葉にも表せず自らも抑制できない（ほど強烈な）域に達した」との意で喜び、無我夢中さを示すものなのであろう。内心の感情が強力に「運動」し、その域についに「到達」＝「変化」を遂げたという「もう」の本質を端的直截に示す用法としてそのありうべき所以が十分に理解されるように考えられる。

V

最後に、冒頭に記した、そもそもの筆者の問題意識の発端としての、「の」と「だ」の付加の可否の点を取り上げよう。記したとおり、「まだ」は「の」・「だ」双方可、「もう」は逆に双方不可と考えられる。この点の解明に、右に論じた「もう」・「まだ」の性格をいかに用いるべきかを検討したい。

まず「だ」の場合から取り上げよう。述語に「だ」を要するのは一般に名詞述語文である。これにつき、いわゆる「ウナギ文」と関連して「だ」は「述部の代用化」とも説かれる。[5] なるほど、

㉔社長は8時だ。

と言うと、「社長は8時に来る（乃至帰る等）」とも解される。しかしこの説を当該「まだ」と「もう」に適用するとき、

㉕彼はまだだ。（＝まだ来ていない）

が言えるのはいいとして、

㉖彼はもうだ。（＝もう来ている）

となぜ言えないのであろうか。ここにおいて筆者は、「だ」の解釈自体、右「述語代用化」説と異にせざるを得ないのである。「だ」は名詞述語文・形容動詞述語文・（可能な副詞による）副詞述語文において現れる。「だ」が示すものは、右説のごとき（任意の）述語の代用化ではなく、まさに「性質＝状態」の指定なのではないか。

㉗彼は学生だ。（＝名詞述語文）

㉘ここは静かだ。（＝形容動詞述語文）

㉙最近はサッパリだ。（＝副詞述語文）

仮にそうであるなら、「まだ」に「だ」が付き得、「もう」に「だ」が付き得ないのは蓋し当然ということになろう。何となれば、「まだ」は全くの「状態」に関わる以外のものではないのに対し、「もう」は実は全然そうではなく、むしろ本質的に「変化」＝「運動」に関わるものであるのだから。「の」もまた、「デアル」の意に解せば「だ」同様、その「まだ」・「もう」への付加の可否が無理なく理解されよう。勿論、副詞全般への「の」と「だ」の付加（の可否）の問題が右の観点だけで解決できるなどとは筆者も毛頭考えていない。しかし少なくとも一つの要因として考慮されるべきものとしては扱われてよいであろうし、右観点で解決できぬ局面を逆に導き出す一つのよすがとしては機能しうるだろう。副詞の理

論は、いやさ副詞の理論こそ、全体性と統一性を有さなければ事実上意味のないものと考えられる。しかしてまた、個別的現象（＝個々の副詞の意味・用法の検討）からそれが証されるものでなければこれまた意味がない。最終的に形容詞・形容動詞連用形等の他の「連用」修飾の諸形式をも視野に含め、さらに連体修飾の理論との有意義な関連性の下に副詞の理論が位置づけられるとき、はじめて十分な修飾の理論が得られたと称されよう。本稿は余りにもささやかな、筆者なりの理解に達するための第一歩に過ぎなかったが、池田・金水はじめ諸先学の業績に導かれつつ忌憚なく私見を述べさせて頂いたものとして御覧頂ければ幸いである。

注

（1）「もう」と「まだ」―状態の移行を前提とする2つの副詞―」、池田英喜、「阪大日本語研究11」、一九九九年六月。

（2）『日本語の文法2　時・否定と取り立て』所収、「1　時の表現」、金水敏、岩波書店、二〇〇〇年一一月。

（3）『現代副詞用法辞典』、飛田良文・浅田秀子、東京堂出版、一九九四年九月。

（4）「状態の移行前を表す「もう／まだ」について」、池田英喜、「阪大日本語研究12」、二〇〇〇年四月。

（5）「接続のうなぎ文―やっぱり述語代用説―」、奥津敬一郎、「日本語教育」第一一一号、二〇〇一年一〇月。